

口承文学の原型と変遷

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 文学史研究会
	公開日: 2024-09-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浅見, 徹
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-284

Title	口承文学の原型と変遷
Author	浅見, 徹
Citation	文学史研究. 4 卷, p.1-6.
Issue Date	1956-09
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	文学史研究会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

口承文学の原形と変遷

浅見 徹

1 口承文学

文字を持たない人々は、自分たちの知識を耳から口へと伝えていった。文字がまだ日本に輸入されていない時代、というのではない。それが一部の階級の所有物である時は、常にこの口承はおこなわれている。人々はその話に、あるいは実生活に必要な知識を求め、あるいは慰安を求めていただろう。われわれは、こういう伝承のなかから文学性を含むものを採りだして、説話といい、口承文学と称する。これは内容に即して、神話、伝説、昔話などと分類される。

説話を語り伝える役は、それが巫でも、部落のボスでも、また、各家庭のオジイちゃん、オカアちゃんといろく一般に拡がっていてもたいして問題ではない。もちろん、説話は時代とともに「生きていく」。すなわち、伝承者の恣意によって変えられる部分が少くない。だから、語り伝えるものが誰かということと内容がかなり変わることも考えられる。時の政治に迎合して話がつくり変えられる、ということもあろう。古事記がまずその例だ、といわれるかもしれない。だが、われわれはその中から、古いわれらの祖先の、民衆としての姿を思い浮かべることができる。口承文学は集団の文学だ、民衆のものだ、といいきる前にこういったことを頭に入れて置かねば

ならないが、それを覚えていれば、この考え方に對してかなり楽観的になつてもよいだろう。いずれ文字に定着される前のことを考えているのである。ここには、個人の確立というむずかしいことが語りの意識にのぼることはない。後世、芸としての語り方に個性が強調されても、語りの内容は重視されないのに似ている。内容が問題になるのは、ケースがいささか別である。また、幼い時を振りかえつてみるまでもなく、人々は決して未知の話ばかりを要求するものではない。幼児が、カチカチ山の話を、花咲爺の話を飽くことなく繰り返して求めるように、古代の説話が、その話にはじめて接する人だけを対象として語られていたとは考えられない。さもなくば、平曲が、太平記読みが、あるいは落語の同じ話があれだけの生命を保ちうるものかどうか。とすれば、耳から口へと語り伝えられているかぎり、急激な変化、つまり個人の大きく介入する余地というものはあまり考えられない。だから、説話が生きていて變つていくのは「時代」の名で呼んでいいのである。

しかし、説話はこのように變つていくのだから、われわれが古代の口語りの伝承をそのままに知る方法は、絶対にない。それを知るための鍵となるのは、各地から採集した類似の説話と文字に定着さ

れたものである。これらいくつかの説話をつき合わせてみれば、一つの話がどのように成長していったかということは知られるし、それぞれで語られていた時期を文献は示してくれるだろう。

ところが、文字に残すということが今日とは較べものにならないくらい重大な意味を持っていた時代の文献のことだから、記されたままをもって、当時の口語りの内容と極めつけるわけにはいかなない。今日、口承文学保存の目的で採集され記載されたものでさえ、国語学的には何の役にもたないといったような場合が多い。つまり、話の大筋ぐらいがわかるだけである。完全な記録には、録音によるべきだろうが、これとても、マイクを突きつけられれば、と考えると、どんな場面のもを採集したら完全なのかが決められなくなる。説話は「生きていく」のである。さらに、文字に定着される場合は、筆録者の個性が介入してくる。上代はいさ知らず、単なる写しかえでも、その写すことに大きな意味をもった時代のあったこと（池上嶺遺先生「もしほぐさ」国語国文二十巻七号）を思えば、説話を書き留める際に、創作とかわらない意識をもつたのではないかと考えられる。しかもなお、伝承を基にした創作という意識までにはかなり時代を下る必要があるし、それ故に、上代では口承の場合と同じく大きな改変は許されなかったと考えられる。そして「時代」に生きた個人は考えられないのだから、時代を越れば、あるいは見方をかえれば、改変も潤色も「時代」の産みかゝれるといってもよいこともある。

2 浦島の話

現在も生きつづけている浦島の話が文字に定着されたのは、周知のように、書記、風土記、万葉、というように古い。それらは現在

の話とも違ひし、それぞれの中でも少しづつ形を変えている。これらを通じて話がいかにか成長し、「時代」と記載者はいかにその成長に関与したかを考えてみることにする。

一休に、浦島に関する口承が、馬琴のいうように、搜神後記などを翻案してつくられたものとは考えられない。この話は、上代に書き留められた説話、現在もなお語り伝えられている説話に、多くの点で共通点をもっている。つまり、いくつかの要素に分解すれば、その個々は古代の説話としての類型を示す以外のなものでもないから。あるいは、この類型という点からみれば、民族の歴史の浅い時代におこなわれる説話は、多分に共通点を持っているから、単に日本列島に住んでいた民族の話として限定する必要はないかもしれない。しかし、松村武雄氏などの指摘されるように、発想の同一性をいうよりは、南島系の説話の流入を認める方がおだやかではある。が、この話の源流がどこに求められるかの問題は、いま直接に関係はない。われわれの先祖たちが語り伝えていた当時の状態を眺めようとするのだから。

一応、浦島に関する口伝えをうかがう資料として、次の名を挙げておこう。日本書記巻十四にある記事、万葉集巻九にある高橋虫麻呂の作と推定される長・短歌各一首、釈日本記のひいた丹後風土記、平安時代に成ったと思われる浦島子伝・続浦島子伝の群書類従所載のものと扶桑略記にひかれたもの。これらの成立や関係については山岸徳平、柿村重松、小島憲之などの諸先学に考察がある。その外にも、日本紀寛宴和歌、伊勢集、源氏物語、神仙伝等、この話に触れた作品は多いが、根幹をなすのは前記のものである。時代を下ってお伽草子などがあるが、これらは一まとめには扱わない。

3 浦島たちの素性

これらの文献を通して、水江浦島子がひとり舟に乗り釣をしているという発端の部分にはかわりはない。丹後風土記は三日三夜といひ、万葉は七日というが、どちらが原形というようなことはないだろう。その数自身は話の内容に大きな意味を持つてはいない。ところで、この浦島子の素性についてはどれもほとんど語っていない。これは語られないのが当然だろう。ただ貧しかった、それだけの理由がその主人公に思いがけぬ幸運をもたらすのが古い説話らしい。竹取翁にしても、彼が野山にまじって竹をとっていたということ——賤民のような身分を示すのだと誰かがいっていたように思う——だけであるし、鵲池の話、その他現今採集された民話の中にも同じものがいくつもある。むしろ、亀を放してやったから、というお伽草子の報恩の話は蓋異記以来の伝統をひく仏教的な匂が強いし、いじめられている亀をあがなう現今の童話は、あまりにも勧善懲悪的である。だから、群書類従の続浦島子伝が「蓋上古仙人也」といっているのも、筆録者の一つの合理的解釈である。口伝では彼の素性が説明されていなかったことは、その前の「不知何許人」の句ではっきりしている。天仙である蓬萊山の女に逢うために仕立てあげられた地仙に過ぎない。この合理化は、「時代」とともにその度を増すのである。

次に、万葉以外の諸本では、亀を釣りあげ、その亀が美しい女に変わったという。亀は古い時代からその姿を見せてはいる。日本の上代の説話にもトミズムの名残りのあることはよくから指摘されている。ところが、倭迹迹日百襲姫命、山幸彦の話、大三輪伝説、蛇（蛙）婿入の原型では、動物イコール神であって、神の本体

が動物だと信じられている。これらはトミテムそのままの感じであるが、浦島子の話では、女の本体は海神宮の女、または天上仙家人であり蓬萊山に住む仙人と考えられている。亀は浦島子に近附くための仮の姿の意識が強い。こうなると、富登多良伊須岐比売命の話と同じく柘枝伝説の系統をひくものであり、トミテムからの一歩後退である。ただ、風土記でその名を「亀姫」というところに古い名残が見える。さらに押しすすめるならば、書紀や扶桑略記の続浦島子伝が「大亀」であるのに対して、風土記が「五色亀」といい、群書類従のものが「霊亀」という場合、この一つ二つの文字すらも、合理的な解釈が文飾となつてあらわれたとも考えられる。この時、「霊」の字は神仙思想とタイアップしたものであろうが、これが「アヤシキ」という日本語を示すためだけのものとしても、なお、このことがいえるだろう。ところで、万葉の中には亀が出てこない。これはどんなふうに考えられるだろうか。亀のいない話があったというのが一つ。元来、仙境淹留乃至神婚説話がトミテムと結びつかねばならぬ必然性はない。だから、これも考えられることである。また、虫麻呂が消してしまったという考え方。この消し方にしても、亀の出現を嫌つた場合と、亀は当然の前提として記事を省略するためとの二つ。しかし、この歌はかなり長いものだから、あえて省かねばならない理由はないだろう。ことに、女のことばなどを克明にしているのだから。故意に抹殺したとすれば、明らかにトミテムの否定である。当時の知識人たちの頭脳では亀が女に変わることはなかったとみてよからう。この作者がこれを回想形式でうたい、浦島子に対する批判もある点など、抒情的な取り扱い（久松潜一博士）を示していることから、この個性がトミテムを消し

たとめてもよい。これに対して、亀が姿を見せない口伝えがあったとの仮定は、そのような伝えないこと、類型が少いこと、が立場を弱くしても、否定もできない。けだし、上代・中古の文献はそのたびに口伝えから文字に移されるよりも、文献から文献への縁がかなり強く考えられるのである。

浦島子の逢った女が蓬萊山に住む仙女だというのは、中国の神仙思想の影響をうけていることと考えて間違いない。しかし、大部分の書がこの形をとっていることをみると、口語りとしての話も平安朝にはこの形で伝わっていたこともあるかもしれない。が、それはおそらくは一部のインテリの間にとどまるのみで一般化しなかったろう、と推測される。これについては、中世のお伽草子がその支えとなる。すなわち、この女は「みづからはこの龍宮城の亀にて候ふ」と名乗っている。ここに、亀イコール神性を持つもの、という一つの古い型のトーチケズムを施すとともに、古く「龍宮」の名はあらわれないが、そこには「蓬萊仙宮」よりは万葉の「海神宮」につながらる縁を保っているだろう。そして、常世国の海神宮、及び海神処女というのはいかにも上代人の考えそうな環境である。事実、常世国は記紀・風土記のところでどこにみられる。ただ、その概念ははっきりしたものではない。「世」と「夜」では仮名ちがいが、出雲風土記では根堅州国と同じように考えられている。もつとも、田道間守の話、少彦名神の話などでは、この浦島子の話と同じく海を越えた国らしい。常世の名は出なくても、海神宮やその女は山幸海幸の話なんかには当てはまりそうだ。群書類従の浦島子伝が同じものに載っている純浦島子伝からの略抄であるように、扶桑略記の純浦島子伝は丹後風土記と文獻的な意味で同系とされるが、これらでは淹

留の場所についてはつきりしない点がある。海中大島(扶)海中博大之島(風)とあるにもかかわらず、昴星・畢星である七賢(少)子、八賢(少)子があらわれ、特に風土記では女を天上仙家人という。神は天にあるというのが一般的な考え方であるところから、神性をもったものという点に関して何かの話が混入してきたのだろうか。スバル、アメフリが他の説話に大きな役割を果たしていることもないし、中国からの直接の出典をもった潤色でもないらしい。

浦島子の行った場所の説明は、この話の中でも一番自由な想像の翼が伸せるところである。話としては、とにかく人間はなれがしていればよいのだから。タイやヒラメが舞い踊るうと、お星さまが口をきこうと、そこは語る者、書く者の個性が勝手にふるまえる。ほかの文学書からの借りものの語句もほとんどここに集中している。

4 浦島の帰還

浦島子が故里へ帰る時の理由は、文章にあらわれているかぎりでは大差なく、父母、故里に対する懐旧の情である。書記は以下の敘述を欠き、「語在別巻」と附け足しているだけで、その別巻はいま伝わらないが、もしそれにある話がもっと続いているならば、ほかの書の話と同じようなものだろう。ただ、群書類従所収の二本では、女の方が浦島子の顔色を見て帰国を勧める形をとっている点に特異性がある。浦島子と女が逢った時に女の方から誘うというのは、男の立場からの結婚の一つの望ましい形をあらわしているものとして、神婚説話にありがちな形である。しかし、別れの場合には、山幸彦の話にしても、男の顔色とか一つのためいきとかをいぶかって事情を尋ねるのがふつうの型であり、女の方から一度帰ったかどうかと切り出すのは、ありうべき元の形ではない。なぜなら、

この帰郷は一時的なものでなく、永遠の別離である。これは単に説話の型としてそうあるのだから、聞き手もこれが永別になるだろうと思いつつ聞いている、というだけでなく、主人公二人もこの予感を抱いているものとして語られている。女はむしろ神性を持つものだから、男がふたたびこの地へ戻らぬことを感じとっている。それだけに別れの悲しみも強いし、匣をも与えたのである。（この匣がアダとなつて浦島子は帰らなかつたのだ、とみるのは近代的な理窟になつてしまう）浦島子は望郷の念にひかれながらも、同じく別れを悲しみ、そして、もはやふたたび帰つてこようという意志さえも表示してはいない。彼も、すぐ帰つてくるだろうとは思つていないのである。よしんばそれが筆録者の個性的な文飾であるにしても、話の筋を変えてしまつたものではない。しかし、女の方から勧めるとなると、この書の極端な神仙化の傾向と同じ線上のものと考へざるをえなくなる。つまり女をつよく神仙化したのでこの一聯の事件の進展を女の意志によつて押しすすめていこうとしているのである。

5 玉手箱

さて、浦島子は玉匣（万葉では櫛篋）を買つて歸る。歸つてみれば地上の世界は既に数百年の時日が経つて、彼の家も知る人もない。浦の老人から自分が既に遠い過去の物語の人物にされていることを知つて、途方にくれて匣の蓋を開く、扶桑略記では、「遂に旧里」以下の敘述がない。が、話がこれで終つていたのでないことは玉匣を買つてゐることで判る。匣は、タブーとそれを破ることによる破局、という一つの型にはまつた話を導くため以外の何ものでもない。龍宮は何ぞかみやげをくれるところであつても、この匣が山

幸彦のような、あるいは俵藤太のような、他の役に立つものならば、そんな伝えが一つくらいは残つていそうだが、その形跡は何もない。とすれば、これは破局を導くための前提にすぎない。だから、扶桑の話も続きを期待してもあながち無理ではないだろう。

万葉には数百年を経たという記事はないが、故里の何ものも見出すことができなかったのだから、それは当然含まれていてよからう。山幸彦、伊邪那岐命、田道間守の話などでは、どこかに行つてゐる中に長い時間が過ぎたというようなことはない。浦島以外にこんな形の話は伝わっていない。が、中国には王質が碁を見ていた話をはじめ数多い。だから中国からの輸入だ、と推論するのは性急に過ぎよう。ならば、この浦島帰郷の話すべてを否定しなくてはならない。浦島は悲劇のために歸つたのである。

匣を開けたことによつて女との再会の機縁を失うことは、各書共通で元の形を保存している。いうまでもなく、神に禁じられたことを破ることによつて永別せねばならない話は、ギリシャのサイキとキューピットの話は別にしても、わが古代の文献にも数多く拾うことができる。ただ、その後浦島がどうなつたかについては、年老いて「のち遂に命死にける」という万葉、「老大忽来、遂不知所終」という群書類従の続浦島子伝、「頂天山之雪、乗合浦之霜」という浦島子伝、年老いたことにも死のことにも蝕れない風土記、といういろいろな段階がある。ここから考えれば、口語りとしての話では、必ずしも死まで要求していなかつたのだから。事実、匣は浦島子と女との縁を断ち切れればその役を果たしたのである。ただ、この悲劇(?)を一層悲劇的にするには、紫煙は単に蒼天に飛び去るだけでなく、浦島子を覆うて数百年の仙境滞留を一挙に現実に引き戻す方がより

効果的である。とすると、この演出は他書に影響されずとも当然通りうる説話の成長の過程である。従って、口語りとしてもそこまで進んでいた場合もあったと推定することは困難ではない。

個々の文献がどれだけの潤色を施したものは、いくつかの話を較べあわせることと、なにをたよりに色をつけたか、ということとでかなりの部分がわかる。後者については、この時代のこととて中国の文献を参考にして(必ずしも実際に座右に具えなくても)そのある部分を取り入れることが当然想像されるので、たとえば遊仙窟なり、白氏文集なりからの出典語句を探ること。こうしたことから、すでに群書類従の続浦島子伝は特に中国的な色彩が強いことが明らかにされている。浦島子を「蓋上古仙人也」といつていることは既に触れたが、その結末においても、「飛遊巖河而臨滄海浦也、遂不知所終」なる彼を「後代号地仙」としている。この方向に話がすすめば彼を殺すことができないのは当然である。そして、この流れは後世にまで跡をひくかにみえる。すなわち、お伽草子では、浦島は箱の煙を浴びて若さを失った後、鶴になつて虚空に飛び上り、浦島明神となる。よく似たケースを辿つてはいるが、実はこれはまったく異なる動機からくる。いいかえれば、神仙思想は平安朝時代の貴族たちの抱いた考えであつて、後の時代には消え去つてしまうのである。浦島は神仙とならずに人々の口に伝わつていた。仏教が民衆にまで滲みわたり、古くからの神と合致して本地垂迹の思想があらわれるのはこの頃である。そして、この垂迹は神と仏との合体を強制して、各種の縁起となつて中世に流行する。さらに、鶴亀水葬の思想が流れ込む。これが浦島の話をもかえてしまうのである。こう変えられる間に、人々の間には、どんな形で伝わつていたか

はいま眺めてきたところだが、その他にもいくつかの型があつただろう。もともと仙境淹留と玉匣のタブーは二つの要素であつて、常にこれが合体している必要はない。もし、氏族の起源に関する伝説としての形を保つていたものだと考えるならば、その限りにおいて、浦島は匣を買いはしなかつたろう。浦島の子孫がなければならぬからである。この時に、弟や七世の孫を想定することは困難である。氏族に関する伝説ならば直系を必要としようし、また、いわば子を既に残した隠居の身で仙境に遊ぶこともたいした意味を持つまいから。そしてこの場合には、仙境と現実との時の一致も必要だつたらう。弟や子孫の活躍は、個性的な文芸意識による後世の創作である。また、特定一族から離れた神話乃至昔話としても、匣と結びつかない話もあつたのではないか。書記は別巻に譲つていたので、確実には掴めないが、必ず匣の話があつたとは云い切れない。事実、和歌の世界にとり入れられたこの話は、そのほとんどが玉匣のことであるが、中には「浦島の心になふ妻を得て亀の跡をとみに添へける」という歌もある。これは日本紀竟宴和歌だから、その左註は書記の伝えるところと大差ない。しかし、ともかく書記に対してこういう解釈もあつたことを示してはいよう。日本後紀あたりの浦島帰郷の話はとるに足りないその端かぎりのデッチ上げだろうが、続日本後紀の興福寺僧の長歌には、浦島説話の全貌を伝えてはいないにしても、匣が出ていないばかりか、永遠の生命を保つことをうたつてゐる。天皇四十の賀の歌だからといって、一般の口語りかすべて万葉的に浦島を「おそやこの君」といつているのか作りかえたとしたら、かえつて人をバカにしたような結果を招くおそれもあるからあえてするところではあるまい。とすれば、やはり、こんな話もあつたのである。